

## 文革・天安門事件と青年学生運動

畑 中 和 夫

嚴家棋・高皋著『文化大革命十年史』という本が岩波書店から出ています。文革終結後に天津で第一版が出版され、その後改訂増補されてきているので、一応一番信頼性があるものだということになっています。これともう一つ興味をもったのは『毛沢東の私生活』という毛沢東の侍医の人が書いた本ですが、この人はアメリカへ亡命しました。この二つの本を手がかりにみていきます。

まずレジメに「文革」の特徴としましたが、嚴家棋によればスターリンの場合のような「個人崇拜」とナチス時代のような青年学生の感情的高揚と自発的参加というものが、文化大革命なるものの最も基本的な特徴ではないか、と述べています。その「文革」の理由、または原因といったほうがいいのかも知れませんが、ここでも中ソ対立ということが少し出ています。結果的に見ますと、中ソ対立の問題が文革の過程で中心的な意味を実際持つようになっていて、特に肅正で殺される運命になる高位高官は、ほとんどソ連留学組となっています。これは非常に際立った特徴です。もともと、ソ連留学組が皆殺されたかというところではありません。例えば鄧小平だって少しだけソ連にいたのですから例外もあります。現在「全人代」の常務

委員をやっている人達もソ連留学組ということになりますが、これらの人は当時若かった。三角帽子をかぶせて札をぶら下げられるというのは相当偉い人でないといけないらしい。この間「お前は三角帽子をかぶらされたのか」と聞きましたら、「いや、あれは偉い人だ。わしらはコソコソ農村へ逃げていっただけだ」と言っていましたからね。三角帽子は偉い者だけがかぶらされるものらしく、そこではかなり物理的な力が行使されていたということになります。

ソ連との関係は非常に微妙なものでして、この文化大革命の場合もそういう結果が示すように、ソ連との関係で大きな役割や意味がある気がしてならないのです。中国でソビエト政権ができるのは一九三〇年代であり、一九三一年頃に瑞金で中華ソビエト共和国というのができるのが始まりになるわけです。ところが瑞金で中華ソビエト共和国ができる時、これもソ連帰りの王明がソ連の軍事顧問を連れて帰って来ました。

毛沢東が指導的地位にあったのですが、その地位を奪って王明が指導的地位に立つて軍事闘争上の大失敗をやらかして瑞金からいわゆる長征でもって延安まで延々と旅をしていくわけなのです。その間、四〇万いた兵士が四万になったとまで言われるほど過酷なことでした。その瑞金から延安への途中の廬山という所で廬山会議というものを開き、そこで毛沢東は王明を追い出して主席の地位を確保するのですが、なぜそうなるのかというと、それはコミンテルンの解散の直接的結果であります。

王明が瑞金時代の共産党のトップになり得たのはコミンテルンからの指令によつてです。コミンテルン期の各国共産党は、国際共産党の支部となっていました、その総本山はソ連共産党でした。そのコミンテルンが解散になったのです。

当時ソ連は、反ファシズム統一戦線を唱えておりましたから、その関係ではコミンテルンを解散しないと、特にヨーロッパ諸国では反ファシズム統一戦線の結成ができないという関係もありまして、コミンテルンの解散をやりました。それで中国共産党は独立した共産党である、国際共産党の支部ではないということになりましたので、ソ連の言うことを聞く必要がないということになるわけです。そこでコミンテルンの中  
国派遣代表であった王明を追い出して毛沢東が地位につくということになります。

その頃から毛沢東はソ連に対して含むところがあったというのが一つあると思うのです。その後間もなく戦争も終わるだろうという一九四五年に近い時期、この戦争終結後の中国をどうするかという大問題が起こるのですが、アメリカはご存知のように蒋介石と組んで、蒋介石を応援しておりました。ソ連はどうかというと、これは不思議なことに、やっぱり蒋介石と密約を結んでいたのです。これは最近の秘密文書の公開で出てくるわけですが、特に中国の満州鉄道全体の利権を昔のようにソ連が掌握すること、それから新疆省のあたりはソ連領に編入するという密約がありました。

中国は一九四九年に全土を解放し、中華人民共和国が成立して一九五〇年に中ソ不可侵条約が結ばれるわけですが、その条約の締結の時に、ソ連側は蒋介石との交渉の結果、新疆省の割譲と満州鉄道の利権の確保という問題を毛沢東側の中国に提議するわけです。しかし、もう独立国ですからそのような約束はできない、蒋介石とそのような約束をするのが間違じゃないかということなんでしょう。大激論の末、一応現在の国境線で、いかなる利権もソ連側に与えることなく独立国家として条約を手にするということに形の上ではなったのです。ところがこれもまた最近発見された付属文書がありまして、満州については沈黙し、新疆



省については中国側の所屬とするということは認めるのですが、実は、新疆省における貿易会社の設立はソ連との合併会社しか認めず、他国の貿易合併会社の設立は認めないという付属文書付で一九五〇年の条約は締結されているということがあります。そういう意味では毛沢東としては二重三重にソ連にバカにされているところがあるので、終わりの方では毛沢東は仏のような顔をして一言もものを言わなかったという有名な文章があります。

とにかくソ連との交渉が全くうまくいかなくてイライラしているという意味で、毛沢東には本来的なソ連に対する不信感がありました。けれども他面、解放後の中国の国内建設については、ソ連の経験に頼らざるを得ないところが多々ありました。特に経済協力とか技術供与条約という点では、ソ連の技術や活動スタイルというのがそのまま留学生を通じて、あるいは顧問団を通じて入ってきているといったところがあります。現在でも行かれたらお分かりになりますが、昔のモスクワとあまり変わらないのですね。いろんな役所の動きとか、運輸機関の運行方法とか、お金の取り方など、そういうややこしいところですね。

例えばドイツならバスに乗る時、いきなり切符をちゃんと買って乗らないといけないわけですが、ところが向こうではそうではなく後からゆつくり買えばいいのでワンマンカーになってません。ありとあらゆるところで、ソ連のやり方が未だに残っています。困ったことには、賄賂を取ったり、汚職をしたりというのも全く同じで、官僚主義的なところも全くいまだに感じられます。

裁判官と訴訟事件の当事者の弁護士が一緒に食事をしたり、カラオケへ行つて歌ったり、裁判官の奥さんが訪問してきたら事件の経過についてじっくり相談して、お土産を渡して帰らせたりする。最近私が扱っ

ている事件でそういう手紙が来たのでびっくりするのです。そういうのは僕のソ連生活の経験では全く日常的に非常にたくさんみられたことなのです。

大学の中でも実はソ連のシステムと全く同じシステムがとられていたといえます。カリキュラムでみますと、ソ連の場合ですとマルクス・レーニン主義の思想が一般教養で三分の一を占めています。中国の場合は中国共産党史とマルクス主義、毛沢東思想の歴史、そういうのが四分の一カリキュラムの中に入っています。それからもう一つの特徴は教育方法について、暗記を主体にしているということです。リーガルマインドだとか、考え方がどうのとかはあまりやらなくて、教科書として指定されたものを専ら覚えるのです。

僕は文革が終わった直後に学術振興会から派遣されて中国に二一日間の滞在中ほとんど大学の寮に住んでいたのですが、学生は朝五時ぐらいから起きて池の周りを本を片手に暗記しながら歩いています。これは日本の学生にある意味では学ばせたいくらいのところではあるのですけどね（笑）。日本の学生と全く違うところがありますね。

そういう大学生活だということに加えて、大学の数が非常に少ないのです。北京で申しますと例の北京大学、これもアメリカ資本の創った大学なのです。燕京大学ですか。それから清華大学、これは要するにキリスト教系の大学として戦前に創られた大学で、この二つの大学が主要な大学であります。その他暨南大学という華僑が金を出し合って創った大学があつたのですが、これは途中で廃校にさせられてしまっています。文化大革命の最中に廃校になりました、現在では広州の郊外に小さな国立大学として名前だけ取って復活し

ました。そのほかは革命後にできた人民大学という大学です。北京大学・清華大学というのは階級性に欠けるところがあるというので、共産党が主導的地位をとるという形で創った大学であります。それと、もう一つは政法大學です。これは司法省の直属の大学でありまして、裁判官、検察官、弁護士というのは当初なかったと思いますが、司法機関の要員を作る大学で、この四つの大学しかなかったことになります。人口は革命直後の時期でも優に七億を超え、北京の人口も市内だけで七〇〇万を超えていたわけです。

そんなところに、しかるべき大学が四つしかないということになりますから、入学試験が非常に難しいのです。その当時でも五〇〇倍といわれております。譬えていいますと、黒龍江省、これはハルピンなんかがある省ですが、この省の高等学校のトップの成績の者が、ようやく上海の復旦大学に入学できます。そういうことから北京大学なんかに入ることとは大変なことになるのです。人民大学にしても清華大学にしても同じです。しかも清華大学は本来文系の大学だったのですが、戦前の文学部だけを残して理工系中心の大学に改組してしまうことになります。社会科学が中心なのが人民大学、それから文学と哲学を中心に、あと理科系を置くのが北京大学、理工学系を置くのが清華大学、法律単科大学が政法大學です。

そういう状況で、入学は難しいのですが、これもまたソ連式なのです。つまり、要するに党の幹部、政治協商會議の幹部の子弟はほぼ無試験で入ってしまうことになります。ですから私も、ソ連にいた時も中国に行った時も「あなたは教授だから息子の教育については心配することはないですね」、とよく言われました。「そんな事はないですよ、試験を受けなければいけないのだから」と言ったら、それでも何か特権があるだろうと言われました。その頃、教職員の子弟は立命館高校の授業料や立命館大学の授業料がタダだっ



たりしましたから、そういうことはちょっといいましたけれど、これも僕の息子を入学させた時から有料になりました。それで何の特権もない（笑）。そういうことで、学生は親父さんが「偉い人」の子弟が三分の二で三分の一はそれこそ労働国家となっていますから、労働者・農民の子弟が入れます。これはあたかも我が大学で偏差値が上がっていくのによく似ているわけでして、推薦入学の枠を広げれば広げるほど、一般入学の枠が減りますから偏差値は上がってきます（笑）。だからそういう推薦入学の枠を取ったあとの一般入学だけでいきますと五〇〇倍になるとこういうことになってしまっているわけです。現在は大学の数が増えているわけですけども、入学希望者の数も増えていきますから依然として五〇〇倍という状況です。

そういう大学が何を理由にして、暴力行為を伴う文革の発火点に成り得たのか。学生は情熱的かつナチスのヒットラー・ユーゲントのように自発的に感情的高揚を持って文化大革命に参加していきます。しかもそれが北京大学から始まるということはどう理解するのかというのが、この『文化大革命十年史』という書物の中心的なテーマになっていると思うのですね。これも一つわかったようなわからないようなことになるのですが、中国のこの文革で学生が果たした役割は、教育制度の改革とかカリキュラムの決定権に参加させるとかそんな話はいくつも出てきません。

これは不思議なものだと思うのですが、直接動機になるのは一九六五年一月一日、『文雁報』に姚文元という人の「海瑞免官」という新しく作られた京劇を批判する文章が出るのです。この劇は要するに、皇帝に対して海瑞という高級官僚が「皇帝のやっている事は無茶をしている」と諫めたり、あるいは罵ったりするという趣旨の劇なのです。姚文元はこの文章で、劉少奇を暗に批判しています。

劉少奇が人民公社のシステムと反対の単独経営というか、あるいは各戸経営、請負経営、請負制度を取り入れ始めました。そして反右派闘争の過程で、無実の罪で捕まえられた多くの人の名誉回復を計っているのですが、それをこの劇になぞらえて姚文元は暗に批判していることになります。簡単にいいますと皇帝を海瑞が諫めるわけで、皇帝とは毛沢東のことです。海瑞は、いうならば彭德懷だとか劉少奇のことで、そうやって毛沢東を貶めているのです。海瑞のやっていることは、毛沢東の人民公社三面紅旗の方針に反することを劉少奇はやっているのだし、それをやれと言った彭德懷を海瑞になぞらえて持ち上げているのです。党内に反毛沢東、右翼日和見がいっぱい出てくるのです。毛沢東のような人物を党内に認めるわけにはいかない、フルシチョフのような人物を海瑞としてみとめるというのがこの「海瑞免官」という劇の真意であるという言い方をします。

これは実は、その反右派闘争が終わった一九五九年の頃のことです。廬山会議で彭德懷、これは元帥で朝鮮戦争時の中国の人民義勇軍の総司令官だった人でした。この人が恐る恐る毛沢東に手紙を出した。「自分の見ているところでは総路線・人民公社、土法炉という運動が成功をおさめていると思うけど、実は農村では大変な疲弊が起きているのではないか、天災もあるけれど人民公社によって農民は全部土地をコルホーズ化して、食事も人民公社の食堂でタダで食べられるので、たくさん食べ尽くします。そうすると、もう生産物の供給が追いつかなくなります。しかも土法炉という土で炉を作って、そこへ鉄材を入れ、それが溶けて鉄鋼、鉄の塊ができるというわけで、それをやるために、コルホーズの食堂ができたから各個人の家に鍋釜は必要ないので鍋釜をみんなそこへ入れるわけです。いろんな物を燃やすのですが、山の本も燃やして



しまつて、その結果が未だにハゲ山として残っているわけです。それが間違ではないのかと。つまり、農民は勤労意欲をなくしてしまつているし、皆この土法炉に精を出して農作業に精を出さないから、鉄鋼はできるけど農作物は全くできない。これでは農業は破壊されるじゃないか、ということをおそれる手紙を出したのがその彭德懷の毛沢東宛手紙といわれるものです。

これは後からすれば極めて当然のことだったのですが、毛沢東はこの手紙について政治局の拡大会議でまず検討させます。検討してみると大多数の者が皆、彭德懷の手紙に賛成しました。それで毛沢東は驚き、改めて第八回第八期中全会という全体会議でそれをもう一回配布して、他の人が意見を言う前に、ここに出てくる彭德懷の意見を「ブルジョワジーの動揺性を示し、党に対して攻撃を加える者である」と言った。すると、反対できる者が誰もいなくて彭德懷は浮いてしまうわけです。その結果、彭德懷の右傾批判というのが起こつて彭德懷は失脚し、国防部長を解任されて林彪が国防部長になります。

その翌々年の一九六一年には第八回九期中全会で毛沢東が主導して「实事求是」、すなわち「調査なくして発言権なし」という有名な言葉が後に出てきます。要するに調査活動を一齐に行えという指令を出すわけです。どうしてこんな指令を毛沢東が出すかというと、人民公社の農業生産物が実際の生産物の一〇倍以上の数値で報告されていて、例えば一反の田から米が何石穫れるか知りませんが、三石穫れるのだとすれば三十石と報告してきます。これはソ連でもあったことで、このような現象が出てきます。それで調査しろということになって劉少奇は湖南地方の調査をするのです。これは毛沢東が生まれた省です。そして調査した結果、「三分天災・七部人災」という結論を持つて北京へ帰ってくるのです。それでこのままでは農業はダメ

だ、やはり彭徳懷の指摘は正しかったのではないかということを言いまして、人民公社の解体につながるわけです。各戸請負制・各戸経営というように、集団農業を各戸に分割してそこで請負生産をさせるというやり方を劉少奇は取り入れてくることになります。実はソ連で、フルシチョフの末期からブレジネフの初期になるわけですが、それを始めていたのです。ソ連の農業不振の打開策の一つとして、一番最初にウクライナで、各戸ではないけど班を作って、その班に一定の土地の請負耕作をやらせたわけです。そうしたら一般よりも生産高が七倍にもなりました。これはNHKのテレビでもありましたが、中国でも地方では決死の覚悟で血判状を作って、そういうことをやった農村もあるのです。劉少奇はそれを内部文書で発見して、地方で実際こっさりやってる経験とロシアの経験とをミックスして、彼は彼なりに各戸経営、各戸請負制というものを取り入れてくるわけです。それを毛沢東に発見されて、「それは階級的観点を失ったものである」という批判を毛沢東は口頭でやるわけです。けれどもその頃から、大体毛沢東は浮かされているのだなあとという風に感じ始めるようです。その後の何回かの集会で、毛沢東は鄧小平や劉少奇から「体を悪くしているのだから会議に出るな、代わりに我々があなたの文書を説明するから」という風に言われて、渋々静養するのですが、その時の決定は毛沢東が心の底から考えていたものとは違う決定になる。毛沢東は無理をして会議に出席して発言すると、劉少奇に「老体なのだからもう少し静養したらどうだ。この問題はこの辺りで解決しようじゃないか」と言われます。毛沢東は怒ってしまって「国家の主席として憲法が俺の地位を守っている。党の主席としては共産党規約が俺を守っているんだ。憲法と党規約にてらして、お前達は無礼だ」と言って劉少奇を叱りつけて会場から出たという話があります。その後、会議の席上で劉少奇は公式に

謝罪するのですが、その頃から彭德懷・劉少奇の路線と毛沢東の路線との間で違いが出てきます。

その時期はまた国際的にみると中ソ対立が非常に厳しい時期であります。特に一九五六年のフルシチョフによるスターリンの個人崇拜批判というのが出たあと、毛沢東はこのまま行けば毛沢東の個人崇拜まで危ういという不安を持ちます。そこで「プロレタリア独裁の経験について」とか「再びプロレタリア独裁の経験について」という有名なスターリンを擁護する論文を次々と発表して個人崇拜を擁護してこうとします。

後に一九七〇年、エドガー・スノーが毛沢東に会って一九六六・一九六七年の頃に個人崇拜はあったのかという質問に対して毛沢東は個人崇拜はあった、もっと個人崇拜が必要だと言いました。同時に一番問題になったのは劉少奇で、毛沢東の権威でもって統治してきた体制を劉少奇は実権をもって各省、地方の党委員会を全部掌握し、毛沢東は掌握しきれなくなった。毛沢東は個人崇拜を通じて大衆だけではなく、党組織を掌握していくのだということをエドガー・スノーに話しています。それはエドガー・スノーの本に書いてある通りです。

そういうところから分かるように、正確にいうと一九六五年一月二五日に劉少奇を解任しようということを決めたのだそうです。解任するといつてすぐ解任するのはスターリンだと思ふのです。しかし中国というのはのんびりしているというか、いろいろ策を弄してやるわけで、この敵家棋によれば劉少奇を解任するために実は文革が起ったのだという考え方をとっています。それに一番役に立ったのが学生です。つまり学生は良家の党の子弟が三分の二を占めています。その学生を動かそうということです。問題はこの「海瑞免官」という京劇の台本を書いたのは、当時の北京市の副市長の姚文元で、彼は四人組の一人ですから後に



無期懲役になるのですが、その姚文元が言っているようなあてこすり、つまり毛沢東を皇帝になぞらえ、海瑞を彭德懷や劉少奇にあてて毛沢東批判をしているというこのあてこすりに対して、これはそのようなものでなく文学的価値があると言って擁護したのが彭真で、当時の北京市長です。彼は副市長が書いた論文だからという以上に、内心は劉少奇に近い考え方の人だと思ふのです。

そうしてこの「海瑞免官」というものが、毛沢東批判になるのか、あるいはそうではないのかというのが当時の一番大きな問題になってしまっています。だから文化大革命がどこから始まったのかというと「海瑞免官」の論文から始まったと言われています。これはあたかも、我が大学の紛争が学園新聞社問題から始まったと言われるのと同じく似ているのです。口実になるのですが、これを契機に四清、四つの清い運動を行うのです。これは社会主義運動と言われますが、どういうものかと言えば、経済を清くする、政治を清くする、組織を清くする、思想を清くするという四つの清、四清運動というのをを行うということになり、その四清運動の教材になるのが「海瑞免官」なのです。

これが北京大学で議論される時に、哲学科の主任教授の聶元梓という人が、姚文元の見解に賛成します。つまり毛沢東を批判している論文、劉少奇を擁護している論文だと哲学科の教授は言うのです。他方ではこの当時の北京大学は北京市党委員会の大学部によって指導される大学であったのです。党組織としては北京大学は彭真の指導の下に置かれていました。それで彭真そのものは劉少奇の見解に近い人ですから、彭真の任命した学長、陸平も彭真と同じ考え方を取って劉少奇派の立場に立っている人なのです。それで「海瑞免官」を取り上げながら会議を開くのです。どうして四清の教育運動を進めるかという会議を開きますが、こ

の本によれば、はっきりと四人組の哲学の教授以下のグループと彭真、学長以下のグループと完全に分かれてしまつて、そこで大論争が起つてしまふのです。その中で壁新聞が北京大学に貼り出されて、大多数の学生が、「毛沢東を批判するな、毛沢東は神である。毛沢東を批判する者は牛鬼蛇神である。牛鬼蛇神を大学から追い出そう」ということでもつて、各教員をお立ち台の上に乗せて吊し上げるという形で糾弾、暴行という現象が北京大学から始まることになると言われています。

毛沢東はその事件が始まつた一年後にこういうことを言っています。「文革は学生に頼らなければならぬ。大学の中に何が起つてゐるのか誰も知らない。彼等に頼らずに誰を頼るのか、革命的な学生と教員に任せる他はない。今は授業はなくても飯は食える。飯を食えば体が熱くなつてひと暴れしたくなる。暴れさせないなら何をさせると言うのだ」と。どう理解したらいいのか分からないけど（笑）。とにかくそういう形でもつて、毛沢東のお墨付で暴力行動が始まつて全国に波及していきます。

おもしろいことには、農民はあまり同調しません。農民には下放されたブルジョワ分子が皆農作業をやりますからあまり同調しません。労働者は最初同調していますが、武闘が激しくなるにしたがつて同調していかなくなります。そういう意味では文革の理由として挙げられるのは、レジメにも関連四要因とありますが、一番下の問題、官僚主義・特権・腐敗こういつた問題に反対する民主的な手段が中国には存在しなかつたということです。それであいつた行動を取らざるを得ない。しかも、それが毛沢東の個人崇拜という一般的な雰囲気の中で、完全に制度化されているというのが、結局は究極の原因であつたということになる。だから大学改革なんて一度も出てきません。

それで日本の紛争の頃を思い出すのですが、Maoistと言われたのはそれだっと思います。その影響とね、未だに覚えているけれど、あの時にラチシェフを統社同の諸君が呼んできて講演会をやりました。彼にその時、どうして大学と対立する学生の集会に出るのかと質問したら、ソ連の党中央委員会の決定であるから仕方がないと言いました。そうして中ソ対立が始まり、中ソ両方から我が学園の紛争に火がつけられていたということになるのかな。どう理解したらいいのでしょうか。こういうことで一つお考えいただきましょうか。

了

(立命館大学特別任用教授)